

# 教養科目アカデミックスキル1の概要

菊地 則行

## 1.1. アカデミックスキル1のカリキュラム上の位置と新設・開講経過

アカデミックスキル1は、教養科目の「人文・社会」科目の1つであり、第1クオータ（4月から6月初旬）に1年生が全員履修登録する基本推奨科目（2単位）である（表-1参照）。基本推奨科目とは、コンピュータ理工学の基礎として履修しておくことが全学生に推奨される科目である。教養科目では、アカデミックスキル1と後述のアカデミックスキル2、体育実技1と2の4科目が基本推奨科目となっている。

表-1

授業科目の区分(カテゴリー)	カテゴリー別最低要求単位数	
教養科目(10単位以上)		
	人文・社会	8
	体育実技	2

アカデミックスキル1は、文化研究センターが、全国的な大学教育改革を意識しながら継続的に行ってきた教養教育の実践と検討を踏まえて、2018年度から新設・開講された授業である。新設・開講の背景には、日本学術会議などの国レベルで行われていた現代的な課題に応える教養教育の模索があった<sup>i</sup>。そして、多くの大学での初年次教育の広がりも背景の1つであった<sup>ii</sup>。アカデミックスキル1は、これらを背景としながら、2016年度からの学部新カリキュラムの導入に対応し、センター内外での議論とセンターの実践を踏まえて構想された。具体的には、初年次教育についての学内での議論と<sup>iii</sup>、2003年度から2017年度まで15年間文化研究センターの教員が中心となって取り組んだ教養科目「文章表現法」の実践を踏まえて構想された<sup>iv</sup>。

このような経過のなかで、論理的思考を基盤とする公共的日本語運用能力を中心とするアカデミックスキルの教育を教養教育の土台と位置づけ、その教育を担う授業としてアカデミックスキル1は新設・開講された。

## 1.2. アカデミックスキル1の授業目標

アカデミックスキル1の授業目標は、「読む」「考える」「書く」の3つを論理的に行うことと、学問上の基本的マナーを教育することである（表-2参照）。「読む」「考える」「書く」の教育は、論理的に考える力を基盤として論理的に読む力と論理的に書く力の3つの力を教養の基礎として教育することである。

表-2

2018年度シラバス
概要 教養科目の基礎となる技法—情報のインプットである「読む」、情報から自分の主張を組み立てる「考える」、主張の表現である「書く」の3つを論理的に行うことを学ぶ。また、学問を行う上での基本的マナーを身に付けることで、これからの大学生活の基礎を修得する。

### 授業の目的と到達目標

- ・本や文献の内容を理解できること。
- ・読んだ内容に対して、自分の主張を組み立てることができること。
- ・レポートなどで正確な日本語で論理的な文章を書ける能力を身につけること。
- ・剽窃を避け、適切な引用を行うことができること。

(※全文は資料) ▽

### 1.3. 履修学生数とクラス編成

2018年度の履修学生数は、1年生252名と2年生以上の学生12名の264名であった。前述したようにアカデミックスキル1は基本推奨科目であるため1年生全員が履修する。担当教員は文化研究センターの人文・社会科学科目担当教員6名、体育実技担当教員2名の8名である。クラスは8クラスで編成し、1クラスの学生数は30名から40名であった。

### 1.4. 具体的な共通目標

クラス間の到達内容のばらつきを最小限にするために、すべてのクラスが到達すべき共通の目標として、シラバスで掲げた授業目標をより具体的にした3つのゴール(表-3参照)と目標の文章(表-4参照)を担当教員間で確認した。なお、これらの目標を達成するための授業方法や、共通目標以外の内容の取捨選択は各教員の判断とした。

表-3

### アカデミックスキル1が目指す3つのゴール

1. しっかりと論証を行った文章を書くー論理的に考える
2. パラグラフ・ライティングに従った文章を書くー論理的に書く
3. 剽窃を避け、適切な引用を行うー論理的に書く

表-4

	目標となる文章例
総論のパラグラフ	ディベートを学ぶ意義
①TS 主張	①議論のしかたを学ぶにはディベートが最適です。②ディベートを学ぶことにより、議論に必要な三つの能力ー論理的思考能力、傾聴能力、意思伝達能力ーを、効率よく身につけることができます。③以下、その3つの能力について説明します。
②SS 根拠	④第一に、論理的思考能力が身につきます。⑤論理的思考能力とは、自分の主張が成立する過程を、明確な根拠で抜けなく裏づけることができる能力です <sup>1</sup> 。⑥ディベートでは、肯定側・否定側のどちらがより論理的であったかを競うので、自然と論理的に考える力が養われます。⑦論理的思考能力が高まれば、複雑な状況下でも正しい判断が下せやすし、人を説得することも容易になります。
③SS 前後つながり	⑧第二に、傾聴能力が身につきます。⑨傾聴能力とは、相手の主張に耳を傾け、その論点を見抜く能力です <sup>2</sup> 。⑩ディベートでは、相手の主張に対して指定時間内に反論しなければ、その主張は肯定されたものとされるので、自然と相手の主張をよく聴き、素早くその論点を見抜く力が養われます。⑪傾聴能力が高まれば、議論を噛み合わせ、より深めることができますし、それだけ、相手を説得することも容易となります。
各論のパラグラフ1	⑫第三に、意思伝達能力が身につきます。⑬意思伝達能力とは、自分の考えを相手に効果的に、正しく伝える能力です <sup>3</sup> 。⑭ディベートでは、制限時間内で、第三者のジャッジに、自分の考えを理解してもらわなければ、勝つことはできないので、自然と自分の考えを効果的に人に伝える力が養われます。⑮意思伝達能力が高まれば、人を説得するのも容易になりますし、誤解による問題発生も防止できます。
④TS 身につくもの	(出典 倉島保美 2008 より、一部改変)
⑤SS 定義・言い換え	
⑥SS 根拠	
⑦SS 説明	
各論のパラグラフ2	
⑧TS 身につくもの	
⑨SS 定義・言い換え	
⑩SS 根拠	
⑪SS 説明	
各論のパラグラフ3	
⑫TS 身につくもの	
⑬SS 定義・言い換え	
⑭SS 根拠	
⑮SS 説明	

## 1.5. 教材

授業目標である論理的に考える、論理的に読む、論理的に書くの柱立てに従ってセンターで作成した教材を使用した。3つの共通目的を達成するために、この教材から必要な箇所を各教員が選択して使用した。教材の内容すべてを授業で扱うというわけではない。教材の総目次は以下の通りである。

2018年度・AS1教材 総目次			
<b>1</b>	<b>論理的に考える</b>	3.2.	わかりやすい文の書き方
1-1.	まずは、「論理的に考える」ことから	3.2.1.	文の書き方
1.2.	言葉を定義しよう	3.2.2.	文章の書き方
1.3.	論理には2種類ある—演繹と帰納	3.3.	パラグラフを作る—論理構造を持つ最小の要素—
1.3.1.	演繹的論証	3.3.1.	パラグラフ・ライティングの定義と具体例
1.3.2.	帰納的論証	3.3.2.	パラグラフの内部構造
コラム	仮説演繹法	3.3.3.	直列接続と並列接続
1.4.	論理をどう文章理解につなげるか—言葉と言葉のつながりを意識しよう	3.4.	節を作る—パラグラフをつないでハンバーガー構造を作る—
1.5.	論証の図式化	3.4.1.	節のコアメッセージを一文でまとめる
1.5.1.	ワラントを推定する	3.4.2.	パラグラフの接続パターン—直列と並列—
1.5.2.	複雑な論証の図式化—論証の拡張	3.4.2.1	結論の方向へ論理的に接続する直列の関係
1.6.	論証への反論	3.4.2.2	同じ種類のパラグラフが並列に接続する横の関係
コラム	反論と対立議論との違い—水掛け論を避けるためには	3.4.2.3	直列・並列が混在する接続パターン
		3.4.3.	文章の論理性をチェックする方法
<b>2</b>	<b>論理的に読む</b>	3.5.	文章全体を作る—Thesis statementとアウトライン—
2.0.	はじめに	3.5.1.	Thesis statement—文章の「核」を考える—
2.1.	読解のステップ①主張・根拠、②ワラントの推定、③論証を組み立て直す	3.5.2.	アウトラインを描く—自転車には補助輪付きで乗ろう—
2.2.	要約と要旨のつくりかた	3.5.3.	Thesis statementとアウトラインの具体的な作り方
		3.6.	文献検索と引用—巨人の肩の上に立つために—
<b>3</b>	<b>論理的に書く</b>	3.6.1.	文献検索のやり方
3.1.	文章を書くための心構え	3.6.2.	文章執筆と引用のやり方
3.1.1.	ハンバーガー構造は安くて早くておいしい	3.7.	イントロダクションとコンクルージョン—大事な最後のラッピング—
3.1.2.	はっきり言い切る勇氣、無難にまとめる非礼	3.7.1.	イントロダクション—文章のキャッチコピーを作る—
3.1.3.	ワープロは文章執筆のモビルスーツ	3.7.2.	コンクルージョン—読み手へ渡す玉手箱—
3.1.4.	見せるは一時の恥、見せぬは一生の恥	3.7.3.	タイトルと見出し
		3.8.	終わりに—推敲とプレゼンテーション—
		3.8.1.	推敲！推敲！推敲！
		3.8.2.	プレゼンテーションもハンバーガー構造
		3.8.3.	今後の学習に向けて

#### 1.6. アカデミックスキル2との関係

アカデミックスキル2は、アカデミックスキル1とともに教養教育の基盤的科目として2018年度に新設・開講された授業である。そして、問題解決型教養の基礎を教育することを目標とする授業であり、アカデミックスキル1履修後の第2クオータ（6月中旬から7月末）に、1年生が全員履修登録する基本推奨科目（2単位）である。この授業では、現代社会で生じているテーマについて学生に問題を設定させ、解決に向けたアプローチを行わせることによって、人文・社会の認識法の基礎、つまり問題解決型教養の基礎を教育すること目標としている。問題の検討やレポートの作成にアカデミックスキル1で学んだ論理的思考や公共的日本語運用能力が活かされることを想定している<sup>vi</sup>。また、第3・4クオータに配置されている教養科目（哲学、法学、社会学など）を履修・学習する際の導入の役割も持っている。

---

[注]

i

具体的な例は、中央教育審議会の答申、日本学術会議の報告書にみられる。

中央教育審議会 2002 新しい時代における教養教育の在り方について  
中央教育審議会 2008 学士課程教育の構築に向けて  
日本学術会議 2010 21世紀の教養と教養教育  
日本学術会議 2010 大学教育の質的保証の在り方について  
日本学術会議 2010 日本の展望－人文・社会科学からの提言－

ii

具体的な例は、次のような文献にみられる。

河合塾 2010 初年次教育でなぜ学生が成長するのか－全国大学調査からみえてきたこと－ 東信堂  
山田礼子 2005 一年次（導入）教育の日米比較 東信堂

iii

簡単に経緯を紹介する。

2012年度

角山学長（当時）から、学生の生活・学習面での支援策の検討について文化研究センターに要請があった。

2013年度

会津大学での転換教育、初年次教育の有効性を文化研究センター内で検討し、生活・学習面での初期適応を目的した初年次ゼミを教務委員会に提案した。教務委員会、教授会、学内各部署で検討を行った。

2014年度

教務委員会にワーキンググループを作り、文化研究センターの初年次ゼミ案を中心に全学的な検討を継続した。文化研究センターの案は、少人数の初年次ゼミを基礎とした学生間の人間関係と担当教員との人間関係を形成（クラス担任制度の充実）し、生活面での初期適応と、スタディースキル・能動的学習態度の教育により学習面での初期適応を促進することを目的としていた。ワーキンググループでは活発な議論が行われ複数の案が作成され、教務委員に提案された。しかし、教務委員会では合意が得られず初年次ゼミの開設は見送られた。とくに合意が困難だった点は、初年次ゼミに生活面での適応を目的とするクラス担任制度の機能を持たせることだった。

2016年度

2014年度までの議論を踏まえながら教養教育としての初年次教育のありかたを、文化研究センター内で検討を行った。その際、2014年度に提案した初年次ゼミの生活面と学習面での機能のうち後者の面にのみ焦点を当てて検討した。

このような検討を経て、アカデミックスキル1・2は新設・開講された。

iv

次の澤論文では、授業「文章表現法」の実施内容が紹介され、論理的に考える力を教育する必要性がセンターの共通認識になった経緯が説明されている。このような論理的思考の教育の延長上にアカデミックスキル1が構想された。

澤 亮治 2015 「文章表現法」実践報告 II 会津大学文化研究センター研究年報 第22号 19 - 59

## アカデミックスキル1 シラバス (2018年度)

## 概要

教養科目の基礎となる技法—情報のインプットである「読む」、情報から自分の主張を組み立てる「考える」、主張の表現である「書く」の3つを論理的に行うことを学ぶ。また、学問を行う上での基本的マナーを身に付けることで、これからの大学生活の基礎を修得する。

## 授業の目的と到達目標

- ・本や文献の内容を理解できること。
- ・読んだ内容に対して、自分の主張を組み立てることができること。
- ・レポートなどで正確な日本語で論理的な文章を書ける能力を身につけること。
- ・剽窃を避け、適切な引用を行うことができること。

## 授業スケジュール

課題を通して、読解力、論理的思考、文章作成をトレーニングする授業とする。学生が作文などの課題に取り組み、教員がそれを添削したり、学生同士で批評しあったりしながら進められる。具体的には、配属された各クラス担当教員の指示に従うこと。

1. 論理的に考える (1)
2. 論理的に考える (2)
3. 論理的に考える (3)
4. 論理的に読む (1)
5. 論理的に読む (2)
6. 論理的に読む (3)
7. 論理的に書く (1)
8. 論理的に書く (2)
9. 論理的に書く (3)
10. 論理的に書く (4)
11. 論理的に書く (5)
12. 学問のマナーを守る (1)
13. 学問のマナーを守る (2)
14. まとめ

## 教科書

資料を配付し、その他に必要であれば担当教員が指定する。

## 成績評価の方法・基準

学生の授業参加と到達目標に応じた課題により評価が行われる。

## 履修上の留意点

教養科目の基本推奨科目(SR)であるため、履修することが望ましい。また、アカデミックスキル2への接続も兼ねている。

## アカデミックスキル2 シラバス (2018年度)

### 授業の概要

特定のテーマについて問題を発見し、設定することを通して、人文・社会科学の認識法の基礎、問題解決型教養の基礎を修得する。

### 授業の目的と到達目標

人文・社会科学的認識法を基礎として問題に学問(科学)的アプローチができる。

### 授業スケジュール

教員はそれぞれの専門を活かしたテーマを提示する。

クラスごとに以下のような予定で授業を行う。

1. テーマの学習 (1)
2. テーマの学習 (2)
3. 文献・資料の検索法
4. 問題の発見・設定 (1)
5. 問題の発見・設定 (2)
6. 問題の発見・設定 (3)
7. 問題の発見・設定 (4)
8. 問題の発見・設定 (5)
9. 問題へのアプローチ (1)
10. 問題へのアプローチ (2)
11. 問題へのアプローチ (3)
12. 問題へのアプローチ (4)
13. まとめ・発表 (1)
14. まとめ・発表 (2)

### 教科書

資料を配付し、その他に必要であれば担当教員が指定する。

### 成績評価の方法・基準

授業目的に即して課されるレポートにより評価が行われる。

### 履修上の留意点

アカデミックスキル1を履修済みであることが望ましい。

